

現代芸術文化による
「まち(地域)づくり」

札幌アーティスト・イン・レジデンス
(S-AIR) 実行委員会 事務総長

山本 謙一
(建築家・都市計画家)

今回は「まちづくりはまず、人づくり」という観点から始めた、国際芸術文化市民交流の「芸術文化によるまちづくり」札幌アーティスト・イン・レジデンス(S-AIR)の活動を主体として見えてくるものを主体に、「アート」と「まち(地域)づくり」の最近の話題の四方山話を語らせていただきます。

1 まず始めに 「現代芸術によるまちの意識づくり」について

地域によそ者を入れること。または地域で活用してこなかった人材を導き入れること。

特に芸術家なら、一般人とは違ったナイーブな感性で意表を突くセンセーショナルにして摩訶不思議な、地域の潜在力を醸成していくことが期待できます。そしてその場合、芸術家を導き入れるのなら、私はずばり、「現代美術ジャンルの作家がふさわしい」と関係の皆さんに進言しています。

歴史を振り返ってみても、「その時代の現代美術家」もそうしてきたのですから、「いまは今の現代美術家の活力を活かすのがふさわしい」ということで、一般的な方への表向きのわかりやすい説明とさせていただきます。

実はこのジャンル、作家は「まちを美術館とみだてて表現する」ことを得意とする方が案外多くいます。しかも特徴的なのは、まちのポテンシャルの低いところこそ、彼らのエキサイティングな興味や「まなざし」が注がれやすいということです。

例えば身近な事例では、公園選定でイサム・ノグチ自身が札幌をくまなく歩き、最終的に廃棄物処理場であったモエレ沼近くを選定したという理由も、まさにイサム・ノグチが現代美術家であったからに他ならないのです。

2 What is GENDA I 美術?

現代美術は感覚上の快樂・快感の美学ばかりではなく、思考と感覚の両輪で精神世界を追求するところがあります。ソーシャルデザイン的な要素を含む対象に、新たな精神的豊かさを獲得すべく、現代美術作家は「あるまなざし」を投げかけ、創造的な感覚のシーズ(種)へと結実させて表現したりします。

私は折に触れて、その創造的な感覚の「シーズ(種)」が、幹や枝や葉そして花として商業デザインに展開されていくことを見続けてきました。

案外、優れた現代美術のエッセンスは10年後に優れたデザインとして開花し、普及しはじめたりするものなのです。

現代美術はこのように、いわゆる素朴に美しいという「従来の伝統的美」を超えた美の拡張領域に挑戦しています。そのおかげで、わたしたちの生活は20世紀以降さまざまな美の「ものさし」を獲得してきました。例えば、物々しい単純な形態のコンクリート、鉄に関して近代の美の範疇で

とられきれなかった美の在り様も普及してきました。近年、コンクリート打ち放しの美学が一般に受け入れやすくなったのも、この20世紀以降のさまざまな美の「ものさし」のおかげです。

ある方面で現代美術家や現代美術の洗礼手続きを受けた方であるなら、とかく機能一辺倒になりがちな土木構築物に関しても、物の見方やまなざしの与え方、表現の可能性を地域の人々に啓蒙することができます。そのようにして例えば、地域の環境構築物に関して現代美術的まなざしがあれば、地域の人々は「これは今現在、自分にとってどうしようもない環境構築物だけれど、こうすればきっと、これは実は面白く、自分にとって実はとても愛着の湧くものになっていく」という発想も芽生えていきやすくなります。繰り返すようになりますが、現代美術家なら今の環境を活かしながらい化（トランスフォーム）させ、今後のまちに新たな感性の可能性を地域に孵化促進し新たな意識啓蒙を提供してもらえる期待があります。

従って、現代芸術家の表現領域を適切に把握できるコーディネーターがおりますと、従来のまちづくりワークショップではなしえなかった地域の新たな覚醒を人々に奏でることも可能となってまいります。

ここで、ある作家の事例を挙げたいと思います。

東京芸術大学教授の川俣正さんは現代美術で世界的に有名な美術家です。炭鉱のまち三笠出身です。高校までいたので、空知地区等道央圏にも知り合いがいます。地域社会の歴史と現在、そして未来をつなぐ川俣氏のインスタレーション表現は地域住民との協働制作のなかで、地域の新たな共同ヴィジョンを暗示し、地域の人々を覚醒へといざなう表現活動を国内外で行っています。疲弊した意識の産炭地域住民の新たな展望、意識作りには例えば仮設的な強度のある現代美術が有効であったりします。実際に北九州の産炭地田川で長期プロジェクトをされています。(http://www5a.biglobe.ne.jp/~onthetab/newfiles/kcmt/kcmtptj.htmlを参照ください。)

この事例以外にも北海道でも、そのように優れた先生や作家がおります。現代美術では寂れた産炭地域に新たな意識を醸成し一定の成果をなした、ドイツのルール地方の産業遺跡地域活性化事業のように、本当に寂れてしまったまちの再興にはアートが有効に活用されている事例が海外には案外あります。寂れたまちづくり活性

化では初動段階として、まず、人のマインド作りが重要です。そのマインドの再興により、よそものが流入し始めたりもします。よそ者とは言うても「新たな眼差しのその地域のファン」です。そうなれば、それはまちの再興を加速させる人的資源のチャンスにもなります。

さて、現代美術は20世紀後半から写真芸術領域の面でも脚光を浴びるようになってきました。現代美術館では20世紀の写真美術展が案外、行われています。

また、現代美術はIT技術を含むメディアコンテンツ産業の領域の面でもメディアアート等の領域で盛んに多くの表現概念モデルの創造的な「種」を胚胎させようとしています。そこでは日本の基幹産業になりつつある世界的に誇れるアニメーションも現代美術領域とは重なり合います。世界に誇れる日本のメディア産業と現代美術はサステイナブルにリンクしあっている部分があります。

さらには、現代美術は商業美術と現代美術の関連の面では、最近、あの有名なルイヴィトンのバッグデザインに、世界的に有名になりつつある現代美術作家、村上隆により、日本画的でアニメーションティストの、なんともいえないファインアートの世界が導入デザインされました。この村上隆バージョンのルイヴィトンバッグは従来とは趣を異にする新たなルイヴィトンの展開としてあえて現代美術作家が起用されております。話題にもなっているようです。

このような例のように今の高級ファッションブランドは現代美術を確かに呼吸しております。トレンドイナ高級ブランドの店内は商業デザインとはいえ、限りなく上質な部分で現代美術の優れた成果エッセンスを取り入れています。それが若者や上昇志向の方や芸術文化的な意識の高い方、ハイソサイエティの方に支持される高級ブランドたる重要な部分を一般メジャーな中で現代美術が実は担っています。しかも現代美術はブランドのブランドたる高い付加価値のところに結びついています。経営戦略で申せば、そこでは現代美術は付加価値経営の手法にもなっています。ものが技術的に成熟すればするほど商業的な付加価値は「芸術文化の纏=ファッション」を求めるといえる意味で正攻法なのはご存知のことでしょう。

日本のアニメーション、キャラクターのコンテンツ産業も、日本ならではの芸術文化として世界で高い評価を受け始めていることは、スタジオ・

ジブリの「千と千尋の神隠し」でもご存知のことでしょう。このような1980年代の経済大国から1990年代への日本の文化パワーを活かした経済生産をGDPならぬグロス・ナショナル・クール（GNC）と呼んでいることは新聞でご存知かもしれません。このようなコンテンツ産業は放送、出版、新聞、音楽、映画、ゲーム等が含まれるもので2001年でも11兆円の市場規模があり、海外輸出を伴って年々高い成長をしていると書かれたりする一般記事も案の定、出回ってまいりました。（参考：日経2003.7.29経済教室）

というように、このような興味深いことが現代美術の表現活動を通じて20数年の体験から次第にわかってまいりました。

ところで、一方で現代美術は難しいといわれております。確かに事実、わたしにも理解を超える作品がいまだにあります。先ほども申したように現代美術は「素朴に、素直に美しい」とはいえない美の拡張領域に挑戦しているため、「未だ自分が新しい美のまなざしを用意できていない」場合もあります。その場合はただ単に「どういうことか？」の疑問がわたしの心の中に妙に焼きこびりついているものです。それが、芸術家のもくろみで、実は「鑑賞者への積極的な関与の仕掛け」であったりもします。その表現上の違和感をかかえる中で日常の雑事をこなしながら生活していると、ふと「そうか。あれはこういうことか」と思う瞬間があります。それはふだん知り得なかった美の領域が非日常ではなく、何と普段の生活日常の中から触発され、「ある新しいまなざし」が獲得できたからに他ならないのです。それは「日常生活の中での新たな美の発見」です。そして、それは日常の多様な精神領域の豊かさを獲得できる契機にもなります。

3 混迷する変革の時代には芸術文化による 平和的な創造的破壊を。現代美術はいわば、 「まちづくりのビタミン&スパイス」

現代美術の講釈が長くなりました。さて表題の「アート」と「まちづくり」に関しての、もう少し広がりのある関係性の具体例で述べたいと思います。我々とも実際、活動ネットワークや人的交流がある「東京都墨田区での向島プロジェクト」は最近の好例です。

再開発では、従来の「高度利用と都市機能の更新」ばかりではない「街並み景観と持続可能なコ

ミュニティへの再編」へと見直し、狭い区域での高容積型ビルばかりではなく、地域のポテンシャルに合った低容積型ビルにするほうが望ましい再開発があるのはご存知かもしれません。しかしこの地域ではそれ以前に行わなければならない「まちの素地作り」がここには求められています。

ここは東京のなかで、かつては伝統的に木造長屋下町文化が息づき、戦後日本を支えた中小企業の町工場などが集積したりもした場所です。一方で不動産所有者の複雑な調整が特にある等、いきなり再開発しようにも時間がかかる場所であり、やはり都市防災上の観点から今後、木造老朽化住宅の再整備を視野に入れながら、いずれにせよ再整備せねばならない運命にある伝統な都会地域です。

この地域でアートの力による新たな下町づくりプロジェクトが盛んに行なわれています。

そこでは押し寄せる都市化を感じつつもある意味、下町の居心地の良さの中で、得てして住民が無意識に眠ったままです。老朽化した木造長屋も多く、年寄りも多い。このままではこの斜陽化免れない崩壊過程を感じながら住んでいる。いや、その意識すらもなく、先ほど申したように、どっぷりと居心地よく意識すら眠っている状態かもしれない。そこにヨソモノ体験してきた元地元民、完全なるよそ者がこの地域のすぐれた、いわばある意味で洗練された「東京下町都市コミュニティ文化」の可能性に魅力を感じ、新たなまなざしでこの懐かしい都会文化を現代に再考し、再興を試みています。その活動は、ひまのないビジネスマンではなしえない高齢者、子供、主婦および商店主経営者のいる地域だからこそできることを自由人である芸術家、学生、大学関係者、まちづくり関係者、アサヒビールをはじめとする地元企業および墨田区の行政と、それぞれがともにかかわり、より包括的なまちづくりへむけて、専門家、行政も交えて一方で向島学会なるものまで立ち上げ、いろいろな側面で活発にまちづくり啓蒙活動を行っています。

ここで見られる活動は、単にまちを彫刻オブジェで飾ったり、品よく展覧会を開いたり、閉じられたサロンのような閉鎖的な美術展示の芸術消費ではなく、地域に開かれた日常美の再発見の場、まちづくりの育成の場として、現代美術的試みが展開されています。S-AIRでも東京のこんなところまで海外作家を交流させたりもしております。これは共鳴現象です。

さて将来、この地域は都市防災上、整備がいくら行なわれなければ、すぐれた下町コミュニティ自体すら守れなくなる時期がくるはずでしょう。そのときのために新たな地域再整備に向けて、このすぐれた下町コミュニティがアートを「まちのビタミン&スパイス」にしながら、新たな眼差しが地域の人々に芽生え、地域を新しい環境へと自力で再考できるようになるよう、今後、この地域に期待したいものです。

北海道で言えば札幌の開拓の早い古い市街地地域や函館の西部地区など北海道の拠点都市の歴史のあるまちなかで地権者の錯綜さくそうとしたところなどが参考になるといえます。

4 北海道札幌での国際芸術文化交流によるまちづくりの試み=S-AIR+α

さて、筆者がこのような思いから地域でここ最近具体的に実践した活動があります。

4年前からはじめた「札幌アーティスト・イン・レジデンス（略称S-AIR：エス・エアー）」です。これは国際芸術文化交流による地域まちづくり事業です。S-AIRというと「札幌航空」というように航空会社のネーミングのようですが、こちらは国際的な芸術文化の風を地元へ運ぶ運営団体です。（ホームページ <http://www.iacnet.ne.jp/~sair/artists/index.html> 参照を。）

これは最近、日本では約30程の事業がおこなわれております。

府县市町村と地方自治体が主導して行なわれるケースも多いのですが、このS-AIRは民間主導で筆者が立上げた事業です。国内外の美術活動経験から札幌にも多くの知り合いが私にはいました。この事業にはその方々と活動することで求心力のある地域芸術文化の可能性を開示でき、相乗効果のある有意なプロジェクトになるのではとの期待感がありました。

そこで一気に志を同じく賛同される方に呼びかけたところ、志のある方々に集まって頂けて、最終的には民・学・官そして市民ボランティアという組織で運営を構築することが出来ました。

なお、このS-AIRはこの手の事業としては日本でも規模が大きく、6～7人の将来を嘱望される海外現代美術作家を招聘しょうへいし、地域交流しております。（http://www.jpff.go.jp/air/list_j.html をご参照ください。）

国際芸術文化地域交流事業である、このS-AIRには概ね3つの目的があります。

そして、それは従来にない概念の可能性をレジデンスに求めることが可能であることを言及して、その可能性の触手を伸ばしているところに日本で、また世界でもアーティスト・イン・レジデンス事業としてはユニークな発想であることが、この我々S-AIRの事業の特徴です。

まず、ひとつは異文化にふれる海外作家と市民のありかたです。

作家がこの地域が生活する上で創作上よかったと思える環境を与えることです。これには慣れない外国滞在客の日常の生活不便のバリアフリーをいかにとってあげるかというスタッフをはじめ市民ボランティアのホスピタリティー支援が重要になります。そこで交流する中で「日本のこの北海道の札幌はそしてそこに住む自分たちはどういう存在なのか」と相対化して無意識かくせいが覚醒されて意識化されていきます。そしてその目指す方向は筆者が盛んに皆さんに提唱している「違うから楽しい」という状況を作り出すことにあります。

一方で「地球上の人々は顔、姿形は違うけれどもみな日本人と同じ心情感覚を持ち合わせている人間である」という共通意識も芽生えます。表面上社会的に宗教、自国政治経済状況が色濃く背景として反映されている場合ももちろんありますが、確かに多くの国の作家と交流触れ合うごとに人としてのその思いは確信めいてまいります。

差異性と同質性の微妙な共存、ローカルとグローバルの草の根的な意識啓蒙がここにあります。そこで教えられることは、まちづくりは優れていても表面的な欧米のコピーのまちづくりでは欧米の人は観光に来てくれないということです。幸い日本には優れた伝統の日本スピリットがあります。欧米人はそこにあこがれてきてくれるのです。ここは重要です。

芸術文化の中では、もっと日本人らしい精神活動をしなければ対等に文化交流できない部分もあるのです。それは交流するとわかります。そこで交流することの意味を市民は教えられるのです。

二つ目にはやはり交流による芸術文化の人的ネットワークと人的資質向上です。

作家は「日本の北海道の札幌はよかった」と帰ったときに海外で吟遊詩人として北海道、札幌という地域を糧に海外作品発表し、また多くの人に「口コミ」してくれる期待感があります。なによ

り、レジデンス事業で作家として選ばれたことは国際的な評価としては「世界の先進国日本の大都市の札幌という地域が自分の作品を評価して購入をしてくれた」ことと同様な扱いに繋がります。これは作家にとってとても名誉なことです。ですから、作家は作家歴にことあるごとに「SAPORO…」の文字がその作家の略歴パンフ、チラシに、美術館に、ギャラリーに、そして新聞に掲載されます。さらに有名になれば、さらに違った有意なメディアに掲載されていきます。

今までに現代美術映像作家でS-AIRをあとにしてからまもなくあの有名な、カンヌの国際映画祭に出品し、「ある視点」部門でクランプリを受賞し、その後も受賞歴を重ねつづけている現代美術映像作家もいます。滞在中にNHK教育に出演したり、NHKの衛星放送で作家の作品が番組としてとりあげられたり、現代美術の最高峰のひとつ、ベネチア（ヴェニス）ビエンナーレ等の現代美術国際展にノミネートしたり、著名な美術館のコレクション収蔵を果たしている作家も複数出てきています。選考委員会の一人としてもうれしい限りです。

そのようにして、おかげさまで我々の思いの甲斐もあってか、海外作家の応募数が最近では100名を超える反響です。継続の効果を思い知らされます。

その中ではもちろん、地元芸術家、学生、芸術関連の専門家、そして市民、ボランティアの交流があります。市民の芸術文化に対する意識関心の底上げと国際的に打って出る作家、学生の為のスプリングボードを用意することが狙いです。海外に出るときのアドバイス、人的紹介その海外作家を頼りに有効な表現活動ができるための人的インフラづくりです。

地域施策のスプリングボードがいろいろな角度の分野で多く用意されていて、域外にも発信し、人が打ってでられるよう、また域外からその地域を新たな眼差しで活性化し発信できるよう、域内外の人的交流を深める実りある面白い仕掛けがあると地域の自立、地方分権に役に立つのではと思います。北海道は観光がありますのでやりようがあります。その点は潜在力です。

一方で、日本の教育過程でたくさんの芸術文化関連の卒業生が輩出してしまうにもかかわらず、極めて乏しい日本の芸術市場の中では人的資源を活かされずにおります。芸術家たちまたは芸術に携わる文化芸術支援する専門家については、コミュニケーションとしてのアートを地域にとって地



方分権の意識醸成に向け、「新たなまちづくりの担い手」として、まちづくりの委託業務へと活躍の場が開かれることがこれからは大切ではなかろうかと思っております。そこではNPOと地域通貨、地域ポイントに連動する方向も視野に入れながら、地方分権の担い手として位置づけるべき検討が必要なのではとも思っております。アートにアトラクション要素を手法として入れて市民が楽しみ、その余韻からアートとおして生活の本質を問い直せるそんな市民の覚醒の場を提供する。そんなことがきっと、アートの市民との親和性をグッと高めることになるでしょう。ちなみにニューヨークではそんな芸術家の有用性にかかわらず、芸術家に対し、コミュニティの少数弱者として社会的な人権保障の施策まで行っております。これが国際的な芸術文化の街のインフラの違いでもあります。

そんなことを、意識と理解度の高い行政、企業等に彼ら芸術家方面に促していただけるのであれば、とてもいい方向になるのではと思います。

3つ目にはアートと地域産業との掛け橋・結びつきを模索することに関しての目的です。

サッポロバレーのIT集積もよいのですが、そのIT技術もそれにふさわしいコンテンツがなければ意味がありません。やがてIT技術も一定の成熟をしてゆくことでしょう。歴史が教えるように技術文明の後に芸術文化がそれに精神的な豊かさを付与します。1999年の当初からS-AIRでは「メディアコンテンツ産業育成を意識すべき」と私が方々話していました。そうしたところ、S-AIRの実行委員会のメンバーが尽力され、札幌市の経済局のほうから、メディアコンテンツ企業をインキュベートする施設拠点を事業化していただきました。S-AIRの事業2年目にその施設に唯一ボランティア団体として招きを受け、入居することになり、メディアコンテンツ企業との交流を海外作家を交えて行う方向に結実しました。また一方、市民にこの施設の活動を知っていただく活動組織にもなっております。札幌ICCに事務局を開設することに関してはメディアアート、インタ

ラティブアート、デジタルコンテンツ、ショートフィルム、デジタルアーカイブ、情報デザイン、エンターテインメントロボット、エレクトロニクスミュージック、VR、CGなどArt&Scienceの関連からえられたさまざまな創造的な成果の種（シーズ）を従来の商業メディアコンテンツをも巻き込み、さらなる商業デザインの活性化を促し、高付加価値な新産業経済振興へむけて弾みを付けるよう活動もしております。そのせいか、各地から視察も案外あります。文化庁の指定事業ですが、外務省の国際交流基金でも関心を示していただき、HPのデータベースに当事業が掲載されております。（<http://www.jpif.go.jp/j/> ご参照を）

医療福祉と芸術デザインでは札幌市立高専の大学化の部分にもかかわりが深いのですが、例えば現代美術では患者の自然治癒力を高めるアートセラピー、アートインホスピタル、身心障害者の可能性に着目したエイブルアートなどの相乗効果の伴う接点があります。

また、商店街では各地でも行われている、「ちょっとしたアート」による活性化事業はご存知の方もおられることでしょう。

さらにまた、寂れた場所に芸術家の解放区を作ることできなりその地域がトレンドな地域に浮上し、経済的に活性化しだす事例がニューヨーク・ソーホー地区などわかりやすい例で、海外にはあります。確かに、芸術家以外にはこのような再開発活性化事業はなかなか出来ません。アーティストヴィレッジは職住一体型の新産業地域ともいえる発想が必要です。日本では残念ながら本格的な事例がありません。モデル事業として官・学・民で地域再開発チャレンジをしたいところですがどちらかといえば民主導がいい流れを付けられそうな感触があります。札幌なら北3条通境界の再開発地区や山鼻曙地区などが気分です。実際にS-AIRはその場所で活動したりもしています。

観光産業の側面では、芸術家という、いわば吟遊詩人が地域との交流で生み出した「芸術家の地域表現物語」を携えて、国内外の他地域でも語り部として自分の交流活動した地域について他地域の方々にも口コミ発信してくれるそんなイメージ的存在として広報してくれて、一方、新たな文化芸術の蓄積が都市の目に見えない観光資源として新たな意味を添えて積層してくれるようなことを期待しつつ、今後も支援できればよいと思います。

そういえば、過去に漁師の船と昆布をアート作

品にしてしまった海外有名アーティストもいました。本当に現代アートは、あらゆる観光物産素材を使い何でもありであります。その何でもありというところが地域発想のエクササイズとして大切なのです。何せユニークさが地域の個性であり、発進力だからです。それは地方分権に役立つからです。

このように経済自立ばかりでなく、特に地方分権による地域の潜在力を活かし、特色、魅力を再考し、その結果、地域間競争は避けられ、棲み分け共生へと地域の活力を導くというシナリオを考えることは地域の自立性、対外情報アピール性を考える上で重要となってくるはずですよ。

S-AIR立ち上げ当初にフランスの外務省の文化担当がたまたま、この事業に関心を示していただき、札幌にわざわざお越しいただいて、会話したときがありました。そのときに、文化担当の専門家から「実は中央集権国家であったフランスが地方分権になっていく過程で、このアーティストレジデンス事業が一役を担っていたのですよ」と言ってくれました。本当にそのとおりでと思います。そのおかげでそれ以降、フランスの外務省の外郭団体との協力と関心もいただいたりしました。

ということで、その地域での意識づくりの初動段階、新たなまちづくり活動初期段階にぜひ今後、「アートによるまちづくり」を活用していただければ、違ったまちづくりの初動展開を充実させることが出来ると私は思っております。しかし、残念なのはまちづくり系の方では有名な作家を招いたり、パブリックアートのコーディネーター等の形式で行い、それはそれで有効なのですが、それだけではなく、地域の素材、潜在力を活かし、まちづくりとして横につなぐ方は現代美術を良く知らなければならぬからなのか、日本ではそう減多にいないようです。特に北海道のまちづくり系の方で現代美術の活用に強い方はきわめて少ない状況です。そんなわけで私のような者が、たまたま現代美術がライフワークであるために、上述の経緯から都市計画家協会の会員に推薦してもらったのも、このような問題意識から、なにかお役に立てるのではと思ったからです。

今後もし、このような方面で継続的に「積み重ねは力なり。人づくりは長期計画」のご委託相談があれば、従来とはすこし違う、まちづくりの覚醒コーディネーターを踏み込んで行い、皆さんにお役立していけるのではと個人的には思っております。

残念ながら、文化庁指定事業のこのS-AIRはこのようにある面、芸術文化の人づくり事業なのですが5年の中期事業で今年度を持って終わります。今後、せっかくの実行委員会のこの活力の積み上げ継続成果を活かせないか、各所轄の自治体と協働する意向をもっております。

理解力のある、意識の高い窓口の方から、何かいい情報がS-AIRにあれば、誠に幸甚です。

5 終わりに：芸術文化の架橋づくりは戦争のない平和な架橋づくりへとつづく

最後になりますが、国際芸術文化交流により戦争をおこさない国際平和を草の根的に実践するまちづくりが重要になってきていると、いまさらながら感じています。

異文化の芸術文化の魂の交流を通じて、各国・各文化圏がグローバルな視野に立ちながら、それぞれの経済的・政治的特質、文化、宗教観、国民性などローカルな側面を尊重する「グローバルな発想」を共生の心として大切にはぐくんでいきたいものです。

その中から、互いに心のふるさとを海外にも増やし、その地域に自分の何かがあるそんな地域にすることが爆弾を落とされない地域にする安心のまちづくりに繋がると思っています。いまは悲しいかな、公共事業ハード整備事業は多くの恩恵があるにもかかわらず、場合により、いらぬものに世論では仕立てられております。住民には公共建築などは無意識に「箱もの」と呼ばれたりします。それは建築に住民の心のよりどころがないからでしょうか。地域の人には一方的に出来てしまった受身の箱というニュアンスなのでしょうか。国際間の地域の在り方も同じことが言えると思います。

「あの地域に爆弾を落とすことは自分があるいはさらにいえば人類を汚すことになる。私たちの格を下げることになる。いわば我々の心のふるさとの一部だ。落としてはならぬ」とテロリストの為政者の自制心をも抑制させる海外地域の存在にならなければなりません。蛇足ながら、例えばアメリカはイスラムの精神世界と交流し理解することに失敗しているのかなと思います。それとも、「わかってはいるけれど、やめられないグローバル経済の魅力」なのでしょうか。

ところで私自身はまちづくりは「まちづくりは人に始まって人に終わる」ということで「まちづくりは人づくりが大切」ということにしています。

人さえ創れば金、ものは突き詰めていくと動きまわります。教育が大事ということでしょうか。

偉人たちからの啓蒙はもちろんのこと、地域コミュニティ、家族の人々から伝承される、環境適応しながら生きながらえる思想、知恵の蓄積がまちづくりの基幹を成し、まちがそのような気配たたずまいをもって、まちのソフト&ハードが運営されていくこと。

「私は孤児だったけれど、多くの先人や今いる市民のおかげで、このまちの環境からわたしは多くの人生を学んだ」という優れた人物を多く出せるようなまちづくりが素敵だと思います。そこでは精神的な豊かさが21世紀のまちにあふれているということになりましょうか。

「はぐくみ」という言葉最近よく出ますがこのようにとらえたいものです。

大都市、札幌は風格ある都市を目指しているといえます。風格は格好をつけ、風格ある様に「みせる」ことに決してあるのではなく、風格があるがゆえに、海外との国際的でダイナミックな「はぐくみ」の中で、「敬意」を表される国際都市になる目的がひとつありましょう。その意味で、少なからず「現代アート」も有為であると改めて、ここでもお伝えしたいと思います。幸い北海道の札幌は芸術文化振興を進めていくようです。色々な意味において、今後、お役に立てればと思います。ご一読ありがとうございます。

profile 山本 謙一 やまもと けんいち

1961年札幌市生まれ。北海道大学建築工学科を経て、'87年同大大学院で修士号取得（工学研究科建築計画学専攻）。卒業後、組織設計事務所にてホテル、リゾート、マンションのアメニティデザインを中心に設計活動。その後大手ゼネコン本社設計部に医療福祉施設計画に造詣を深め、デザインビルド方式の設計を学ぶ。'91年アトリエ・ジャクスタポジションを開設・主宰。北海道総合美術専門学校で建築デザイン設計の非常勤講師。リーセントギャラリー（現・現代芸術研究所）にて建築美術部門主任学芸員。'92年設計事務所（現・アウラアソシエーツ都市建築設計の前身）を開設し、建築文化の基盤整備に意を注いだ活動を行っている。現在、札幌アーティストインレジデンス事務総長。アウラアソシエーツ都市建築設計所長。日本アートマネジメント学会会員。建築家、都市計画家、一級建築士。
